

2018年度第18回女子美術制作・研究奨励賞

達成・進捗報告書

氏名 今川 朋実

~profile~

今川 朋実 (いまがわ ともみ)

●略歴

- 1991. 岩手県雫石町生まれ
- 2012. 女子美術大学短期大学部造形学科 テキスタイル専攻 卒業
- 2017. 茨城県立笠間陶芸大学校 卒業
- 2018. 石川県立九谷焼技術研修所 研究科 卒業
- 2019. 東京都在住

●展覧会・受賞歴

- 2011. 「Artists' xmas2011」PeppersGallery (東京都)
- 2012. 「女子美スタイル最前線 2011」横浜 BankART NYK (東京都)
- 2018. 「第41回伝統九谷焼工芸展」能美ロータリークラブ賞 (新人賞)
石川県立九谷焼技術研修所 卒業制作展パーマネントコレクション (永久収蔵品) 選定
100周年記念大村文子基金 2018年度「女子美制作・研究奨励賞」受賞
- 2019. 「福島武山一門展」丸善・日本橋店 (東京都)
「現代作家茶碗特集」日本橋三越本店 (東京都)
「香の器展-香水瓶と香杯-」縁煌ギャラリー (石川県)
「KUTANism-NEXT 九谷展-」浅蔵五十吉美術館 (石川県)
「伝統絵付で愉しむくらし展」日本ヴォーグ社ギャラリー (東京都)
「縁煌10周年記念展」縁煌ギャラリー (石川県)
「福島武山と女流細描陶芸展」伊勢丹浦和店 (埼玉県)
「2019 酒器展」日本橋三越本店 (東京都) 12月出品予定

1、制作・研究の動機・目的

【紋様に命を持たせること】

私は現在、「少女」をモチーフにした絵付け陶磁器を制作しています。

「少女」とは、私が幼い頃から描き続けてきた重要なモチーフであり、また、大人の女性になっても、誰しもある種持ち続ける、又は持ち続けていたい「少女性」を私なりに端的に表した存在でもあります。

「少女」の、柔らかさと鋭さを同時に併せ持ち、無邪気で危うい様は美しく魅力的であり、そのような私の中での概念としての少女を、工芸的な絵付けの小紋「少女紋」として表現できないかと考えたことが、現在の制作に繋がるきっかけとなります。

手法的には、染付けと上絵という伝統技法を用いながらも、「少女」や「ファッション」「建物」等現代的なモチーフを組み合わせて描くことにより、新しく自由な絵付けの表現をしたいと考えました。

私が「少女紋」で描く少女のテーマは、どこかの現実にいるかもしれない「あの子」です。

いつかどこで会ったような、またはこれから会うかもしれない「あの子」のストーリーを意識し、想像しながら彼女たちを描きます。それは私が作り出す紋様ですが、同時に私の知らないところでは、それぞれの物語があり、ひとりひとりが意思を持って生きているのだということ意識しています。

そうした一人一人個性を持った等身大の少女を連なり描くことで、ただの模様ではなく、命を持った紋様になるのではないかと考えます。

また、私にとって「少女」とは、生きづらい世界の中で戦うアイコン（象徴）でもあります。

多くの人が、何かしらの理不尽を感じながら大人になり、生きていると思います。無意識の中で差別されること、若しくは差別すること、「社会」と言う枠の中に当てはめられ窮屈に感じること、自分もその価値観に染められていく恐怖。楽な道に進もうとして、自ら生きにくい世界に身を置き、傷つくこと。

少女紋の少女たちは、裸の子もいれば、大きなパーカに身を包む子もいます。服装も髪型も目の大きさも違います。各々が好きな格好をして、好きなポーズを取り、不満げな表情をしたり、悲しんだり、眠っていたりします。

当たり前、それぞれの少女にはそれぞれの意思があり、その意思のもとに彼女たちは存在し自分を表現しています。

私は、すべての人が他人の目を気にすることなく、誰かに尺度することなく、評価や体面に囚われることなく、自らの意志と考えを大切にして、自分のしたいように自分を表現して生きていくことができる世界を望みます。また、私自身その様に生きていきたいと考えています。

そうした思いを反映させる存在として、私は等身大の自由な少女たちを描き、「少女紋」を命やストーリーを持った紋様として、更に発展させていきたいと考えています。そして、今ある自分の感覚を通して、陶芸や工芸という枠を超え、様々な人に新しく共感してもらえることを目標としています。

2、制作・研究活動

①【赤絵を取り入れた表現】—福島武山—門展—

「赤絵細描」とは、赤一色で繊細な絵を表現する伝統技法のひとつです。

私の作品は、染付け（呉須）と色絵（盛絵具）で絵付けをすることが主ですが、作品に赤を取り入れたことがなかったため、2月に行った展示「福島武山—門展」に合わせて、一部に赤絵を取り入れることにしました。

赤という絵具は、盛絵具をのせた際に盛絵具に負けて色が消えてしまうことがあるため、私は作品の一部にアクセントとして赤で小紋を描きました。

▼「水玉少女紋尺皿」／径30.8cm×高4cm



↑赤を使用することで、画面が締まり、淡くなりがちな色の印象がはっきりとします。普段使用する基本色がパステルカラーのため、原色の赤が入ることにより、華やかな印象になりました。

展覧会では、伝統技法の赤絵を現代風に表現している作家の方の作品を拝見することが出来、非常に勉強になりました。

「赤絵とポップな絵柄がマッチしている」とおっしゃって下さった方、反対に古典的でない表

現に驚く方もおり、様々な感想が興味深かったです。



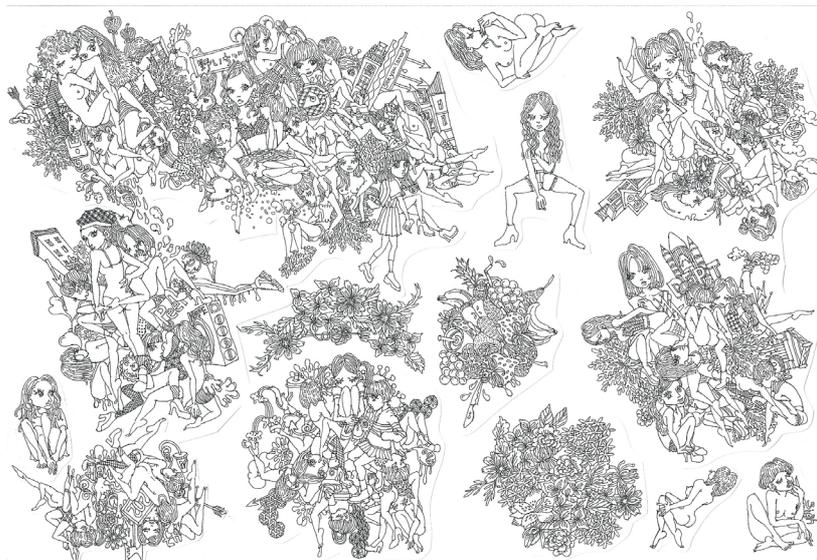
↑雲部分に赤で小紋を描いています。赤は、絵具の種類や調合により、艶や色味が大きく異なってくるため、自分好みの色味にするには研究の余地があると感じました。

②【転写紙の利用】

◆呉須線（絵付けのアウトライン）

自分のイラスト（絵付けのアウトライン）を転写紙にすることで、作品上で転写紙を切り貼りし、コラージュして紋様を作れないかと考え、転写紙を制作しました。

▼転写紙原画



転写紙を使用するメリットは、筆や呉須（絵具）の状態に左右されず、常に同じ模様を同じ状態で再現することが可能になる、という点ですが、逆に言えば原画の温度感がなくなるというデメリットを持っています。

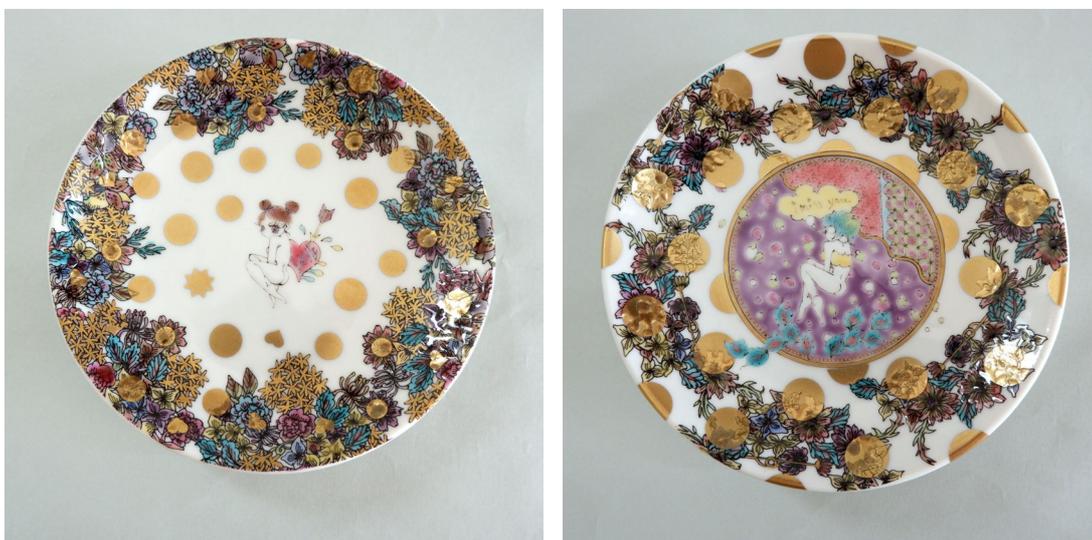
また、転写紙の原画の線が細すぎると、転写が上手く出来ず、結果原画よりも太い線で印刷されてしまうということが分かりました。

私は、細い線を安定して出すことを一番の目的としていたため、これは残念な結果でした。

手描きの線をメインにし、背景に転写紙で模様を貼付けた作品を制作しましたが、転写紙の線の太さが気になってしまうため、原画の時点で描き方を考えなければならぬと感じました。

ただ、コラージュという点では、オブジェ等の立体物（曲面が多く手描きの絵付けが困難な作品）には非常に有効であり、転写紙を使うことで、色だけでない装飾の表現の幅を広げられるのではないかと考えています。

▼ 「hanamon 小皿」 / 径 12.1cm × 高 2.5cm



↑ 中央が手描き / 周りの花模様が転写紙

◆ 金の転写紙

私は作品をよりポップな印象にするために、ほとんどの作品の仕上げに金の水玉模様を描き入っています。

しかし、金液を用いて筆で均一な円を描くことは難しく、時間もかかります。そのため、より仕上がりが美しく安定した模様を描くために金の転写紙で数種類のオリジナル模様を制作しました。

転写紙は厚みが薄く、金液で描くものよりも色が若干薄くなるのが難点ですが、使用方法が簡単のため格段に失敗が減り、効率的に仕事を行うことが可能になりました。

また、作業中の構成イメージも広がりやすくなり、何より単調な作業が非常に楽しくなったことは大きな収穫でした。

▼金転写紙を使用した作品（水玉模様、ハート型、文字等）



③【少女紋に合う形の追求】-現代作家茶碗特集-

8月に開催された展覧会「現代作家茶碗特集」のために茶碗を制作しました。

抹茶碗を制作することは初めてでしたが、今回の制作では茶碗としての使い勝手よりも「装飾」性を重要視し、少女紋という装飾に合う形を模索しました。

形は‘気まぐれな少女’をイメージ。口縁部分を削り出すことで花びらの様なふんわりと広がる柔らかさを出し、見る位置を変えると印象が変わるようにデザインしています。

▼左から melancholy girl、sleepy girl、yummy girl



サイズ／左から、口径 12.5cm×高 9.5cm、口径 11.5cm×高 9cm

オーソドックスな形でも、カットを施すことでゆらぎのある形になります。私は規定的な形が苦手なので、少し不安を感じるようなアンバランスな形を意識して制作しました。

展覧会には、陶やガラス等、様々なジャンルの作家の方が参加しており、それぞれが自由で斬新な形・装飾の茶碗を出品していました。茶碗という概念に囚われないような形状のものも多くあり、形の存在感だけで成立している作品は参考になりました。

次に抹茶碗を制作する際は、更に自由度の高い形に挑戦したいです。

④【展示テーマに合わせた装飾】-香の器展-

「香の器」という、香りを楽しむための創作の器に絵付けをする展示に参加しました。

生地作家さんが作られた数種類の「香杯」と「香水瓶」から生地を選び、その器に合う装飾を施します。

香りを楽しむための器という趣旨でしたので、自分であればどんな器でどんな香りを楽しみたいかということを考えながら絵付けをしました。生地のデザインも装飾的な形をしているため、楽しみながら制作することが出来、イメージも膨らみやすかったです。

▼水玉少女紋香水瓶「melange」／10.5cm×10.5×高10cm



↑ふわりと空に浮かぶ雲のように、香りが広がり漂うイメージで絵付けしました。少女たちも各々自由に寛ぎ漂い、香りと共に流れ混ざり合うように配置しています。

▼水玉少女紋香杯「prima」／9.5cm×9.5cm×高 14cm



↑器と香りが一体化する様な世界観を表現。様々に絡み合う少女たちの紋様と、器の中の香りが相まって、より魅力的な時間を過ごせるよう絵付けを施しました。

また、器の中にも少女を配することで、蓋を開けた際に、香りと少女のイメージがシンクロし、魅惑的な印象になるよう構成しました。

⑤【作品に物語を持たせる】—縁煌 10 周年記念展—

グループ展用の作品として 40cm 径の大皿制作に取り組みました。

形状は「少女」の柔らかい印象と、同時に内包する鋭い印象を表現するため、丸みを帯びた部分とエッジの立った部分を共存させるデザインにし、絵付けは「刹那的な少女たちの感情世界」をテーマとして、少女たちの一瞬一瞬の感情を切り取り、その他の植物や建物等と共に「少女紋」として描きました。

ある一点の事象「ミルクがこぼれ落ちる」、その瞬間から物語が動き出していく様子をイメージして描き込むことで、動きのある作品になるよう意識しています。

また、全てに色をのせるのではなく線描のみの部分を残し、部分的に白盛（普通の盛絵具よりも透明感がなく、より立体感を出せる白絵具）も取り入れることによって、凹凸を出し画面にメリハリをつけた構成を考えました。

▼「ミルクがこぼれて、きみが眠って」／径 40.5cm×高 9cm



↑白描（線描部分）と彩色箇所とのコントラストを意識。時間が止まったかの様な刹那的な世界を表現しています。

3、結び

「女子美制作・研究奨励賞」を頂いた後、私の中で最も変化したことは、制作に対する向き合い方・付き合い方です。

私は「少女紋」という少女をモチーフにした小紋をテーマに制作を続けております。以前は「少女紋」の装飾性（見た目の印象やモチーフの決定）を重点的に捉えていたのですが、この1年で制作を続ける内に、自分の内面を反映させて紋様を構築したいと考えるようになりました。紋様自体が自然と内面の表出に繋がることは勿論ですが、更に意識的な部分を作品に反映させるためにはどうしたら良いのかをより考えるようになったのです。

そして、自分にとって何が一番楽しく魅力的で、どんな作品を生み出したいのか、また反対にどんなことをしたくないのか、ということをよく考えるようになりました。学生の頃は当たり前と考えていたことですが、改めて自分の意志をはっきりさせるということが、作家にとっては重要なことなのではないかと感じています。

また、昨年に賞を頂いた時期は、個人的に生活の中で制作とのバランスを上手く取れずに、モチベーションが下がっていた時期でもあり、こちらの賞を頂けたことで自作品に対する自信が生まれ、前向きに制作に向き合うきっかけとなりました。

学校を卒業し、働きながら作家活動をする私に取って、「制作する」ということは、しっかりと時間をかけて真摯に向き合う必要がある行為なのだと、再確認することができた1年でした。

受賞後、いくつかの展覧会及びグループ展に参加する中で得たことは、様々な作家の作品の中で、自分の作品がどう見えるのかを知ることが出来た点です。

どのような展示でも、その作家の作品ということが一目で分かる様な、確固としたアイデンティティを持つ作品を制作することが、自分に取って今後の大きな課題だと感じました。

そして、展示を見て下さったお客様やギャラリーの方、先生方に直接感想やアドバイスを頂けたこと、また、私の作品を見て、喜んで下さった方がいたことも、非常に嬉しい体験として印象に残っています。

今後の課題としては、先に申しあげましたように、他にはないオリジナリティーのある作品を制作し、差別化を図ることが大切であると感じます。そのためには、自分自身がしっかりと作品に向き合い、十分な考えと納得のもとに、自己満足度の高い、密度の濃い作品制作をする必要があります。

また、固定した技法や作品の雰囲気に関わらず、常に、自分が楽しんで制作できる方法を模索していくことも必要だと考えます。具体的には、作品としての生地を選定やデザインの決定（既成の生地使用では限界があるため、より自分らしく表現可能な生地の確保、制作をする必要があります）や、立体作品（用途を持たないオブジェ）の制作・絵付けにも取り組みたいと考えています。

そして、「陶芸」というジャンルに関われない、自由な作品制作について考えていくことも、今後必要なことだと感じています。

このような課題を踏まえ、作家として今後も活動していくために、まずは満足のいく作品を仕上げることで、そして国内外のコンペティション等に出品する、ネット等でコンスタントに作品を発表することで、様々な方に作品に触れて頂く機会を作っていきたいと考えております。